

【vol.68】空気の読み方について ～その5～ アウフタクトとシンコペーション

どうも、大沼です。

今回も『譜割』について詳しくやっていきましょう。

前回は『アウフタクト＝弱起』の基本の部分を学んだわけですが、今回はその活かし方に入っていきます。

『アウフタクト』に関連しては、強拍、弱拍の概念を解説しましたが、それらの拍同士の関係性は、フレーズ(と言うか音楽)を考えるにあたって非常に重要な概念です。

これらを操れると、フレーズの高度さ、シンプルさだけでなく、ノリやグルーヴなどの基本でもあるので、リズムの理解も深まります。

こういった要素は、普段からそういったことを考えながら音楽を聴いたり、自分が演奏していたりすると、その内、一定以上のレベルで自然と使えるようになってきます。

こうなってくると、どんどん『何を弾いても良い感じ』になって来るので、早いうちに理解し、慣れておきましょう。

では、今回、実際にやることなのですが、「高度寄り(高度に聴こえる様な)のプレイの方法」を『譜割を複雑にする』といった観点から、考えていきます。

前回の『アウフタクト(弱起)』は、譜割を複雑にしていく上での、最も基本的な概念になります。

とは言え、アウフタクトそれ自体は、

『弱拍からフレーズ(もしくは楽曲、メロディー、リズム)を始める』

と言う事でしかないのですが、実際は、**譜割を複雑にする為に存在しているワケではありません。**

ただ、テクニカルな観点から見ると、強拍から「ドン」とフレーズを始めると(例えば1、2、3、4と言うリズムの、1のアタマなどから始めると)、

『インパクト(が大きい)』、『シンプル』

などと言った、『わかりやすさ重視』の方向に寄るのに対し、

弱拍からフレーズを始めると

『次の強拍に来る音(メロディー)の予兆』、『スムーズさ(流れ)』

と言った感じを受けます。

さらに、アウフタクト(強拍の前から始まっているメロディーやリズム)を聴くと、人間は「次は(次の強拍の位置では)こう来そうだな」と予感するわけですが、それを裏切る事によって、「トリッキーさ」や「複雑さ」を感じさせる事が出来るわけですね。

とは言え、強起(強拍から始める事)、弱起のどちらでも、やり様(演奏の仕方やメロディーの作り方)によっては、シンプルにも複雑にもすることが出来るので、この辺り、言葉だけでは中々説明できないところが歯がゆいのですが。

さて、前置きが長くなりましたが、今回は、アウフタクト、と言うよりは、もっと正確に言うと、

『意識的に、弱拍スタートでフレーズを考えてみる』

と言う事と、おそらくほとんどの人が聴いた事があるであろう音楽用語、

『シンコペーション』

の組み合わせによって、複雑な譜割のフレーズを作る方法論を学んでいきましょう。

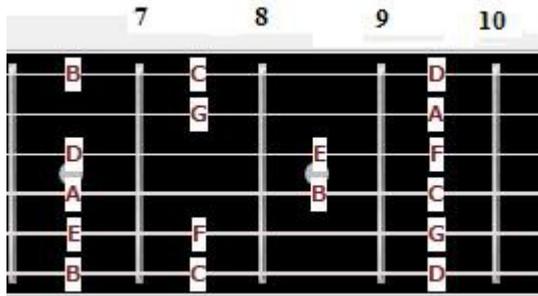
では、一つ目の譜例ですが、まずは以下の様なコード進行を使います。

The image shows a musical score for guitar (S-Gt) in 4/4 time with a tempo of 60 BPM. The score is written for two staves: the top staff is the treble clef (Guitar) and the bottom staff is the bass clef (TAB). The key signature is C major. The first measure is a whole rest in the treble clef. The second measure is a Cmaj7 chord, marked with a '1' above the staff and 'mf' below. The third measure is another Cmaj7 chord, marked with a '3' above the staff. The score ends with a double bar line and repeat dots.

今回の練習は特に、バックギンが無いと効果を実感できないと思うので、メトロノームと1対1のコードストロークだけでも良いので、何とかしてバックギンを作ってください。

テンポは上の譜面にあるように 60(〜80)位の遅めでいきましょう。最初の小節(二重線の前)はアウトタクト用のスペースなので、カウントのみでOKです。

このバックギンの上で弾くフレーズは、Cメジャースケールのこのポジションを使った、



1音飛ばしのシーケンスフレーズです。

普通のスケール練習でよくあるパターンですね。

で、例えばこのフレーズを、先ほどのコード進行の中で1拍目のアタマから弾くと、以下のようになります。

譜例 1

こう弾くと、もう聴いた感じからして「スケール練習やってる感」がすごいと思います。これは譜割的には強拍から入ったパターンですね。

では次に、同じフレーズを16分音符1つ分、手前にずらして始めたものを弾いてみましょう。

譜例2

これは要するに、弱拍からフレーズを始める(=弱起、アフタクト)なわけですが、こうすると、先ほどのような「スケール練習やってる感」が薄れて、それなりにメロディックに聴こえるようになっているはずです。

続いて、さらに16分音符もう1つ分手前にずらしてみましょう。

譜例3

これは、人によって感じ方が違うかもしれませんが、普通に小節のアタマから弾いた譜例1よりはフレーズっぽく聴こえ、譜例2よりはスケールっぽく聴こえるような感じがしますね。

これはおそらく、16分音符の4つのリズムを、ダウン、アップ、ダウン、アップと言う観点で捉えた場合、ダウンの位置からフレーズを開始している為、弱起の感じが薄れているのだと思います。(よって普通に近い(シンプルな)感じに聴こえる)

譜例4はここで入っている

譜例3はここで入っている

通常、強拍は、リズムで言うとダウンの位置に来る事が多いので、16分音符の中の弱拍から入る譜例2よりも、16分音符の中の中強拍から入る3の方が弱起の感覚が薄くなる、と言えるかもしれません。

1小節内(4分音符)なら	8分音符なら	16分音符なら
強 弱 中強 弱	強 弱	強 弱 中強 弱
↓ ↑ ↓ ↑	↓ ↑	↓ ↑ ↓ ↑

ちなみに、16分音符の中での強拍、弱拍の定義なのですが、3つ目の音符を中強拍と呼ぶのかどうかは、手持ちの複数の書籍やネットなどでどれだけ調べても正確に定義している解説が出てきませんでした。

ただ、実際の演奏では、ダウンビートの位置(上の図で言う下矢印)が、比較的強めになる傾向にあるので、解説のわかりやすさを重視して、便宜上、中強拍と表す事にします。

では最後に、さらに16分音符もう1つ分手前にずらして始めたものを弾いてみましょう。

譜例4

こう弾くと、「アウフタクト＝開始、前触れ」と言った、大本の言葉の意味のように、2小節目(と言うか二重線の後の1小節目)の(アタマの強拍の)スタートを予感させるような感覚が強くなると思います。

さて、単純なフレーズを元に、「弱拍からフレーズを始める」と言う事について、3つほど例を上げました。

16分音符1つ違うだけでも、大分、印象が変わる事がわかってもらえたかと思います。

今回は手前の小節にずらしましたが、実際のフレーズを弾く場合は後ろ側にずらす事も可能です。

こういった感覚の違いを理解した上で、いつも弾いているフレーズを意図的に作り変えてみると、これまでとは違ったものが弾けるようになってくるでしょう。

では、アウフタクトの解説がひと段落したところで、次に『シンコペーション』について考えていきましょう。

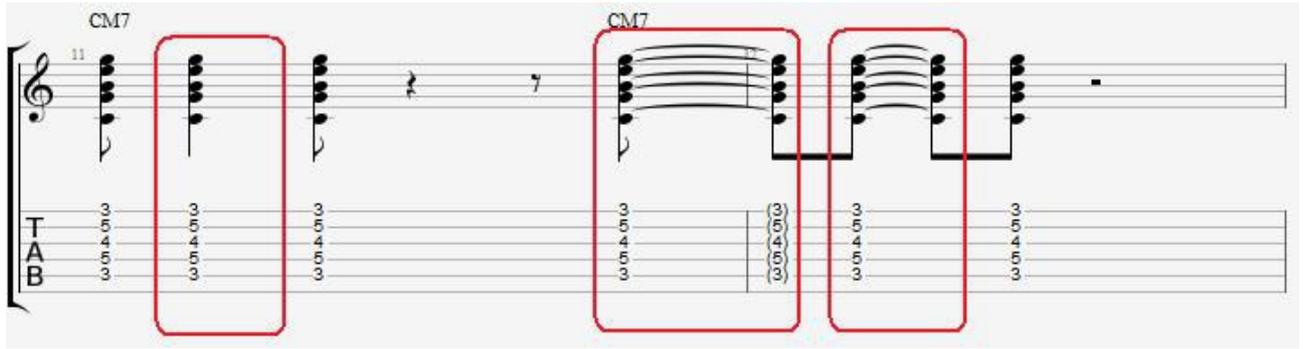
まず『シンコペーション』には、同じような技法として『アンティシペーション』と言うものがあるのですが、実際には、両者をひっくるめて『シンコペーション』と(解説や会話などでは)言っている場合が多い印象です。

シンコペーションの事例としてよく挙がるのは、『リズムを食う』と言うものですね。

現状、シンコペーションを使っていない音楽は、特殊な音楽(民族音楽とか)以外ではほとんど無いと思うので、誰しも馴染みがあるかと思います。

もう、シンコペーションがどうこう、などと考えるまでも無く、ほとんど全ての人が当たり前に使っている技法です。

譜例、リズムを食う



赤枠の部分がリズムを食っている所ですね。

で、シンコペーションとアンティシペーションの定義の違いなのですが、ざっくり言ってしまうと、

シンコペーションは、前にある音(リズム)が後ろに伸びて(繋がって)いる事

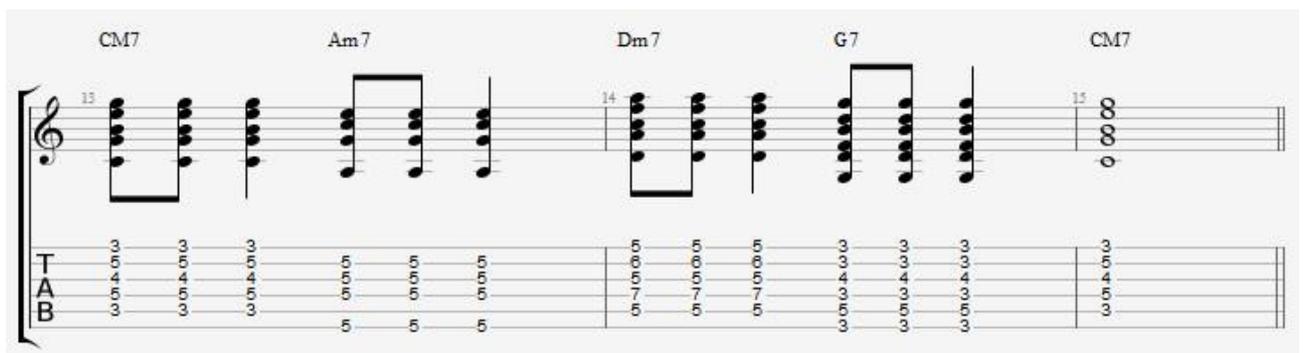
アンティシペーションは、後ろにある音(リズム)が前に伸びて(食いこんで)いる事

となっています。

ちょっと言葉だけではわかりにくいと思うので、シンプルに両者の違いを表した譜例を弾いてみましょう。

まず基本のフレーズとして、以下の様なものがあるとします。

譜例 1、ストレート



普通に 7th 系のコードを弾いたものですね。

で、これをシンコペーションするとこうなります。

譜例 2、シンコペーション

2つ目の8分音符を後ろに伸ばしていますね。

次に、最初の譜例をアンティシペーション的になるとどうなるかと言うと、

譜例3、アンティシペーション

この様に、後の(コードの)音符(構成音)を先取りするような形になっています。

かなりシンプルな譜例ですが、三者三様のフィールを持っていることが、わかるのでは無いかと思います。

ちなみにアンティシペーションには「リズムック・アンティシペーション」と「メロディック・アンティシペーション」があり、多くの場合は単音で解説されていますね。

譜例3は一応、「リズムック・アンティシペーション」“的”なんですが、「メロディック・アンティシペーション」との違いを、細かく説明すると以下の様になります。

1弦5フレットA音はCM7の構成音外の音で、次のAm7の構成音。その音が先取りされていて、リズムがタイで繋がっているので、リズムック・アンティシペーション

2弦6フレットF音はAm7の構成音外の音で、次のDm7の構成音。その音が先取りされていて、リズムがタイで繋がっていないので、メロディック・アンティシペーション

※3～4小節目のB音もG7の構成音を、リズムックアンティシペーションしている

で、先ほども言いましたが、実際の所、アンティシペーション(と言う概念)は、世間ではシンコペーションに統合されて使われている感じがあります。

なのでこのテキストでも、今後、上記譜例のどのパターンでも、解説はシンコペーションに統一したいと思います。

両者の違いをしっかりと理解しておきたい、というマニアックな人だけ、アンティシペーションの事を覚えておいてください。

さて、ではこの概念を使って、フレーズを高度に聴かせたいわけですが、シンコペーションの方も、先ほどのアウフタクトと同じく、注目すべきは弱拍の部分です。

シンコペーションはざっくり言えば、通常の強拍、もしくは全体の中で相対的に強くなる拍の位置を前後にずらす技法なので、普通の「タン、タン、タン、タン」みたいなリズムよりも、複雑に聴こえるわけですね。

これを利用して、フレーズを高度に(聴こえるように)していきます。

では、シンコペーションの解説の時の、key=CのI M7-VI m7-II m7-V 7の進行をバックグにを使って、譜割をある程度複雑にしてみたフレーズを弾いてみましょうか。

譜例 1、バックグパターン

♩ = 60

S-Gt

TAB

CM7 Am7 Dm7 G7

mf

テンポは一応 60 と表記してありますが、無理なく弾けるテンポであれば自由に設定してもらって構いません。

譜例 2、意図的に複雑寄りな譜割にしたフレーズ

CM7 Am7

mf

TAB

Dm7 G7

ちょっと読むのが大変かもしれませんが、音符の長さを数えつつ、ゆっくり弾いてみてください。

少し解説を入れると、弱拍からシンコペーションしている場所は、フレーズに浮遊間だったり、通常の 1、2、3、4 の拍のアタマ(表)に合わせたフレーズとは異なったリズムフィールを感じると思います。(※下の譜面の赤枠の所は特に)

逆に、3~4 小節目の、リズムのアタマ(表)をはっきり打っている場所(青枠内)は、どっしりと安定した感じを受けると共に、このフレーズ全体の、他の部分よりは、なんだか物足りない感じ(音楽的な高度さの意味で)に聞こえると思います。

The image shows a guitar score with two systems. The first system is for CM7 and Am7 chords, with a dynamic marking of *mf*. The second system is for Dm7 and G7 chords. The TAB lines show fret numbers and fingerings, with some numbers circled in red and blue.

この譜例は結構極端に作っていますが、この様に譜割でもフレーズ(やメロディー)の印象をコントロールできる、と言う事を覚えておいてください。
(そして自分なりに色々と試してみたり、既存の楽曲を研究したりしてみましょう)

さて、では今回で、『譜割』についての解説は終わりです。

次回は、『インターバルを広くとる』と言う事について、
やっていきましょう。

ありがとうございました。

大沼